



まる福連携2025

一般社団法人福祉システム北海道

代表理事 高橋 銀司氏

(社会福祉士、介護福祉士)

異業種との対話から福祉を探る

エピソード8(終) サックス奏者 遠藤 稔さん 心からの演奏で音楽にコミット



■サックス奏者に加えて、作編曲のお仕事もされるのですね。

今は牧師の働きも長いので賛美歌がほとんどですが、以前はテレビやゲーム、メディアのための音楽を作っていました。一番多かったのは商業ソングで、本当に景気が良かったので絵コンテが毎日ファックスで山のように来ました。とにかく明日までに4曲作るとか、それが毎日続くという…。もう楽しかったですね(笑)。ゲーム音楽も作りました。まさに、ファミコンからプレイステーションに変わった時代だから、ピコピコ音から変わってレコーディングするようになった時代です。1つのロールプレイングゲームだと20曲、30曲使うので、本当に時間との闘いでそれは楽しかったですね(笑)。20代は作曲にかけた青春みたいな感じですね。

■遠藤さんが作られた代表的な曲を教えてください。

北海道民に分かるものであれば、「水の王国ラグーン」が今でも流れていますね。僕がこの曲を作ったのが20代で、いま58歳ですから30年間同じ曲を使っていたかと思っていますね。もう広く認知されて、とても嬉(うれ)しいです。

■なぜいろいろな楽器がある中で、サックスを選ばれたのですか。

僕は目立ちたがり(笑)、中学校の時に吹奏楽部でトロンボーンを吹いていましたが、トロンボーンは伴奏が多いんですよ。ブーって伸ばすとかウッパウッパウッパウッパとかでメロディーが回ってこない…。そこでサックスも吹いてみたのです。テナーサックス、アルトサックス、ソプラノサックスがあって、その中でメロディーが回ってくるのは、やはりソプラノサックスなので、ソプラノサックスに転向しました。メロディーを吹けるし目立つし、音が綺麗(きれい)な楽器だと思っています。

■ライブ活動などで活躍されていたのですね。

でも…それがですね、サックス奏者と言われるようになったのは40歳を過ぎてからですね。20代は作曲家で、30代は聖書学校へ行ったり勉強メインで、40歳を過ぎてから各地でサックスを吹くようになりました。それから自分でも上手(うま)くなってきた感じがしますね。それまでは譜面通りに演奏していましたが、好きにやろうと思って譜面に拘(こだわ)らなくなってきたら、自分らしい音が出せるようになったと思います。

■遠藤さんがサックス奏者になりたいと思ったきっかけを教えてください。

実は、若い時はギャラと有名になることと女性にモテそう、という不純な動機でした(笑)。でも40歳を過ぎるとそういう気持ちは段々なくなって、人のために演奏したいと思うようになってきました。自分がよく思われたり、上手だねって言われるのは嬉しいけれど、そこがメインではなく、それよりもお客さんが喜んでくれた、高齢者施設でみんなが喜んでくれたというほうが嬉しくなってきました。価値のメインが変わってきましたね。

えんどう・みのる 1967年生まれ、旭川市出身。大学在学中からテレビCM等の作曲に携わり、高校の音楽教師を経て音楽制作スタジオに勤務。ゲーム、テレビCM、番組等多くの制作に関わる。現在は東栄福音キリスト教会牧師の傍らサックス奏者として活動するほか、賛美歌等の作編曲に関わっている。

■お仕事をやる上で大切にしていることはありますか。

心から演奏することですね。テクニックだけでできる人もいますが、なんか嘘(うそ)くさいなと感じてしまいます。本当にその音楽にコミットしてやることです。本当にプロは技術的に上手で、別のことを考えながらも演奏できる人って沢山(たくさん)いると思うんです。でも僕はそういうのはできなくて、本当に心から演奏しないと疲れてしまいます。

また、やはりスタッフさんや演奏仲間をリスペクトすることですね！ ステージでは音響さんや照明さんも居てくださるので、そういう人たちと一緒にいつももっともっと楽しめるように！と思っていますね。

■お仕事をしながら福祉や介護を感じる時があれば教えてください。

高齢者施設で演奏する時はもちろんですが、それ以上に日常から、福祉・介護の仕事をしている人をととても尊敬しています。なぜなら、僕も父の自宅介護をしたことがあるのですが、父1人の介護だけでもとても大変だったからです。本職の方々は沢山の利用者さんを介護して、時間に追われながらもさまざまな業務をしていますよね。自宅介護を経験して実感しましたが、本当に頭が下がる思いです。

■サックス奏者をしていて福祉と共通する部分はありますか。

沢山あると思いますね。サックス奏者として、演奏を聴いてくれている人とかに共感するか、同じ気持ちになるか。自分だけがいい演奏しているのではなくて、やはり音楽って聴いてくれる方々と共有するものだからです。音楽って同じ気持ちになれるというのがすごく大事なことで、そこは福祉と共通する部分だと思いますね。

■音楽分野から福祉業界の人に、どんなことを知ってほしいですか。

若いミュージシャンは演奏する機会が少なく、高齢者施設に演奏しに行きたいという方は多いと思います。人前で弾くのは、特に練習中の音大生ら若者にとっては本当に貴重ですよ。僕も20代の頃に、子どもをおんぶして演奏していたことがありました。妻がピアノ伴奏して僕がお

んぶして吹いて。そうすると、お年寄りの方には「サックス奏者が赤ちゃんをおんぶしていてとても良い」って喜ばれて。ちょっと絵的にも面白いっていう(笑)。20代の頃は施設に随分行きました。どこに行っても自分の息子が可愛(かわい)がられるのも楽しいし、演奏の機会にもなったし、楽しかったですね。ですので、少しでも演奏関連に予算つけてくれたら嬉しいですね。

■ご自身が介護を必要になったとき、こんなサービスを受けたい、または、こんなサービスは受けたくないといったイメージがあれば。

想像したことないですね…。職員さんがイライラしているのは困りますね。でも実際にみんな忍耐ギリギリの疲労感の中でやっているんだらうなっていう想像はつきます。母が施設でお世話になっているのですが、そこは本当にいつもにこやかに迎えてくれるので、その度に尊敬の思いでいっぱいになります。

■サックスを通じて成長できたと感じることはありますか。

仲間とのコミュニケーションですね。「ナイトdeライト」というバンドのサックスを担当しているのですが、とても楽しいです。もちろんステージも楽しいけど、リハーサルや楽屋も楽しい！僕より若い人たちが全然知らない人と知り合いになる機会が多くなりました。最近もツアーで東京、名古屋、大阪へ行っていて、2年前は海外も行かせてもらいました。いろんな繋(つな)がりが増えていくのが楽しいです！

◇あとかぎ◇

牧師や高校音楽教師の経歴を持つ遠藤さん。息子さんが赤ちゃんだった時に、おんぶをしながら高齢者施設でサックスを披露していたエピソードは驚きました。

福祉と共通する部分を伺ったときに、初めに「沢山あると思いますね」と答えてくださいました。それは遠藤さんの視野の広さや寛容さ、柔和さから来ているように思えます。お互いがお互いを認め合い、寄り添う意識を持つことで解決する出来事というのは、私たちが思っている以上にあるのではないのでしょうか。「なんでも知っていると思ひ込むのではなく、『本当に知らなければならぬこと』も未(ま)だ分かっていない」と謙虚になることが大切だと遠藤さんの姿勢をみて学びました。

◆おわりに◆

連載も6年目となりました。いつも目を通していただきありがとうございます。これまで38人の「異業種」の方々にインタビューをさせていただき、▶福祉イメージの視野拡大▶企業の福祉連携がCSRのきっかけに▶各職業理解▶共生社会や合理的配慮に向けて一など、「異業種×福祉」のコンセプトの下、多彩なテーマを共有できたことを嬉しく思います。毎回「業務上、どのような時に福祉や介護を感ずますか」という問い

に、全てのゲストが福祉や介護を感じるエピソードを語ってくださったことは、一昔前からすると大きな変化だと考えて良いのではないのでしょうか。共生社会の実現に向けて、改善を積み重ね、文化として定着させることが大切だと強く感じました。



◎インタビュー◎

たかはし・ぎんじ 小清水町出身。Ezo'n music福祉ジャーナリスト。日本医療大学総合福祉学部助教。札幌市市民活動サポートセンター市民活動相談員。

○(まる)福連携プラス

YouTube配信中

インタビューの様子を動画で配信中。紙面に掲載しきれない内容を10分ほどの動画にまとめています。

